

第 114 回まち歩き 城南五山と大崎駅前地区

目黒駅から品川駅にかけての山手線内側は、武蔵野台地の南端にあたり、馬の背状に独立した台地と深く切り込んだ支谷が連なる起伏に富んだ地形が特徴です。江戸の昔は西に富士、南に江戸湾を望む風光明媚な土地として、名門大名家は好んでこの地に下屋敷を構えました。

明治に入ると、武家の屋敷地は分割され、華族や新興財閥の邸宅へと様変わりし、現在は外国大使館も点在する高級住宅地へと変貌しました。深い谷によって削られた台地は、それぞれが独立した小山のようであり、地元では旧所有者の名前をとって「城南五山」、北から「花房山」「池田山」「島津山」「御殿山」「八つ山」と呼ばれています。今回は前半の三山を歩きました。

日時 2026 年 6 月 6 日(土)13 時 30 分～19 時

集合時間：13 時 30 分

集合場所：目黒駅中央改札口

参加者：13 名

案内人：浅見 (011G)

懇親会：The FooT NIK Osaki (大崎駅南改札直)

歩いた歩数：約 8,000 歩

行程 目黒駅→(花房山)コロンビア大使館→タイ大使公邸→(池田山)池田山公園→インドネシア大使公邸→品川区立ねむの木庭(正田邸跡)→ベラルーシ大使館→(島津山)清泉女子大学→品川区立大崎図書館→大崎駅

○ スタート

梅雨前の僅かな晴れ間が覗く土曜日の午後、目黒駅改札前に集合した参加者は、まず、案内人の浅見さんからルートの説明を受けました。歩くコースにかなりの高低差があるので、設定したコースが難儀ならショートカットも可能とのこと。しかし強者揃いの参加した皆さん、全員が当初のコースを選択し、まずは駅からほど近い花房山を目指しました。



歩きは一人ひとり、思い思いのペースで

○ コロンビア大使館と大使公邸

花房山は、台地の西側、播磨三日月藩森家(1万5千石)の上屋敷があった場所に1911年(明治44年)外務官僚(朝鮮公使など)の子爵花房義質(はなぶさよしもと)が別邸を構えたのがその名の由来です。敷地は戦後に分割、売却され、現在は中層マンションや個人の邸宅が建ち並ぶ閑静な住宅地となりました。

通りに面して3階建のコロンビア大使館、その裏に緑に囲まれた大使公邸があり、門扉から内部を覗くと瀟洒な洋館に広々した庭と来客用の別邸(日本家屋)が見えました。門横の胸像は独立の英雄で初代大統領となったシモン・ボリバルです。



コロンビア大使館とボリバル像



○ タイ国大使館と大使公邸

花房山から東の谷を挟んで遠方の丘に赤白紺の三色旗が翻る三角屋根の建物が見えました。車止めのある急な階段を下ると谷筋の道に出ました。丘の上とは好対照な小さな民家が連なる谷筋の道は大回りしながら急坂を登り、なんとか元の高さまで戻ってきました。

さらに進むと周辺の電柱は在留者向けのタイ文字表記の申請業務代行の広告ばかりとなりました。再開発される傾斜地を過ぎると、目的地の大使館まであと少しです。



急な階段を下って対岸へ



タイ語表記の電柱

タイ国大使館は広い敷地の奥にあって中をうかがうことはできませんが、塀沿いに進むと突然、三角屋根の古風な洋館が現れました。

この建物の歴史は大戦前に遡ります。江戸時代から銚子の醤油の製造販売で財を築いた濱口一族の十代目当主濱口吉右衛門（1883－1945）が1931年（昭和6年）に土地を購入し、1934年（昭和9年）に完成した居宅です。

戦争の影が迫る1943年（昭和18年）、タイ王国大使が邸宅と調度品一式を100万円（現在の貨幣価値で約4億4千万円）で購入し、現在も大使公邸として使用されています。

ここで集合写真を通りがかった小学生（3年生の男の子）にシャッター押しを頼みました。ご覧の通りの素晴らしい出来栄です。



タイ国大使公邸前で

○ 池田山公園

首都高2号線の高架の下をくぐり南東の池田山へ向かいました。この付近は岡山池田家（31万5千石）三代藩主池田光政が1万1千坪の広大な下屋敷を構えた所です。

池田山公園は、品川区が昭和59年に開園した台地の高低差を活かした「池泉回遊式庭園」です。この日は緑眩いばかりの初夏、皆さん日差しを避けて東屋の中で一休みできました。



池田山公園（奥の下がったところに池あり）

○ インドネシア大使公邸

再び歩き始めて公園前の道路に面した敷地に、広い車寄せととんがり屋根の洋館が少しだけ顔を見せました。門扉の向こうに庭を囲う大きな石が組まれています。

この館は、昭和11年に「松坂屋」創業家16代伊藤次郎左衛門の弟、伊藤鈴三郎（1905～1986・監査役、戦後に社長）がロンドン留学の帰国後に建築しました。戦後にインドネシア政府が所有して大使公邸として使われています。



インドネシア大使公邸と庭を囲う石組み

○ 品川区立ねむの木庭（旧正田邸跡）

池田山分譲地内の一角に上皇后美智子さまの実家、日清製粉社長正田英三郎邸がありました。2002年に物納、解体されました。その後、品川区が公園用地として整備し、2004年に開園しました。園内には美智子妃ゆかりのねむの木と様々な樹木が植えられ、季節の草花とともに我々の目を楽しませてくれました。



咲き始めの紫陽花をバックに

○ ベラルーシ大使館

ねむの木庭」のすぐ近くに目立たない低層の建物があり、門の奥に見慣れない外国の国旗が翻っていました。そのまま通り過ぎてしまいそうな東欧のベラルーシ大使館でした。



ベラルーシ大使館

「城南五山」は、元の将軍や大名の屋敷地から明治期には皇族や華族の別邸へと姿を変えました。その後、昭和初期の金融恐慌により多くの華族が土地を手放し、新興の不動産資本によって富裕層向けの開発が進みました。

池田山を歩くと、短冊状に区切った直線道路の幅が6m、宅地1区画の広さは150～300坪の贅沢な土地分譲の姿が所々に残っています。昭和初期に池田家は屋敷地を手放し、堤康次郎の箱根土地株式会社が1929年に分譲し、高級住宅地へと姿を変えました。

分譲地中央の位置、交差点角に駐在所・交番から名前を変えた「池田山地域安全センター」が地域を見守っています。分譲当初からここに用地が提供されていたのではないかと思います。



池田山地域安全センター

○ 清泉女子大学

池田山から南側の深い谷を下って賑やかな表通りに出てきました。国道1号線です。

モダンな複合ビルを横目に通りを渡り「島津山」に入っていました。山の頂部に目指す清泉女子大学があるのですが、下から大回りしなければならぬので、正門にたどり着くまでに我々の行列は長く伸び、皆さん最後の力を振り絞り急坂を上りました。

元は仙台藩伊達家の下屋敷（大崎屋敷）があった高台を旧薩摩藩主島津家が明治6年に取得し、以来島津山と呼ばれています。その後、島津家の所有した約8,000坪の土地と建物は、戦中期に日本銀行、戦後はGHQ接收を経て、1961(昭和36)年にカトリック女子修道会が設立した清泉女子大学へと売却されました。

現在、大学本館として使用されている「旧島津家本邸」は1917(大正6)年に竣工し、設計は日本の近代建築史に名を残すジョサイア・コンドルです。イタリアルネサンス様式を取り入れ、



清泉女子大学本館（大学HPより）

2階建で白い列柱のベランダが美しい曲線を描いています。2019(令和元)年に国の重要文化財に指定されました。

正門前の守衛さんに、何者なのかと不審に思われた一行は、学内には入れないため入口の学校紹介の看板に眼をやりました。そこに書かれた学生数は、今年度入学者は370名、在籍者1,270名と小人数でしたので、「経営は成り立つの？」と心配する声もありましたが、系列の高校・大学が鎌倉と長野市にもあるようです。

今回の「まち歩き」にあたり、小石川同窓生で総合文化学部教授(日本近世史)の福留真紀さん(044)から、先輩方の記念にと、本館建物の外観と内部を撮影した美しい絵葉書を多数頂戴しました。参加者への良いお土産になりましたこと、この場を借りてお礼申し上げます。



清泉女子大学正門前で

○ 品川区立大崎図書館

大学正門前の坂道にはガレージ付きの邸宅が軒を連ねますが、そこから低地に下りると、街並みは住宅地に飲食店が混在しはじめ、目黒川沿いの中層マンションと中小のビル街に変わります。この場所は、戦後の復興期から高度成長期にかけて電気通信関係の大企業や町工場が集まる工業地帯の一角でした。

大崎駅へ向かう途中、トイレ拝借と一休みが必要だった我々一行はモダンなビル内にある品川区立大崎図書館に立ち寄りました。ここは元の小学校跡地に1階をリハビリ室、2階を図

書館、3階以上を介護老人保健施設と病院が入る複合施設になっています。まさに都会ならではの土地利用と言える施設でしょう。

エレベーターで2階に上がり、椅子が置かれた静かな閲覧スペースで思い思いに休憩を取りました。壁際に様々な地元企業の紹介コーナーがあり、何かの精密部品らしい製品も置かれていて、土地柄を誇らしく伝えています。



大崎駅東側を流れる目黒川

○ 大崎駅周辺の再開発と懇親会

図書館からゴールの大崎駅までは徒歩で数分の距離、最後に改札前で案内人浅見さんから駅周辺の今昔、工場の移転と再開発について説明がありました。今回のコースを歩いて、江戸から現代までの土地利用と街の移り変わりを知り、案内人の丁寧な解説と旺盛な知的好奇心、衰え知らずの脚力に感服するばかりでした。

ここで直帰するという二人を見送りし、懇親会は駅とデッキで結ばれる大型集合ビルの1階スポーツバーに11名が参加しました。各種のビールと欧風つまみで乾いた喉を潤しました。皆様お疲れ様でした。 並木隆(022) 記

